日本植物病理學會報

第 XI 卷

昭和 17 年 4 月

第 4 號

石 山 信 一 先 生

(明 治 21 年—昭 和 16 年)

田 杉 平 司

Heizi TASUGI:—Sin'iti ISIYAMA

元農林省農事試験場技師，東京帝國大學農學部講師，正四位勳四等石山信一先生は昭和16年7月24日朝心臓麻痺のため，東京市澁谷區幡ヶ谷町1399番地の自邸に於て突如逝去された。同26日同邸に於て嚴肅な告別式が盛大に舉行せられ，御遺骨は東京市本郷區願行寺内の石山家墓地に埋葬された。享年54歳であつた。

先生の訃は誠に突然であつて，我等後進は唯々驚愕，長嘆した次第で，今尙夢のやうにしか思はれない。

先生は明治21年7月30日，東京市本所區相生町5丁目30番地に生れ，東京府立第三中學校，第一高等學校を経て，明治43年7月東京帝國大學農科大學農學科に入學，大正3年7月10日同大學を卒業せられた。御卒業後同年10月2日農商務省農事試験場に入り技手となられた。大正4年5月13日農事試験場九州支場在勤を命ぜられて熊本に赴任，同6年7月21日技師に昇進された。大正12年4月14日本場在勤となり，上田榮次郎博士逝去の跡を承けて病理部主任となられた。昭和16年4月26日勅任技師に御昇進，同28日宿痾のため農事試験場を辭された。尙大正12年6月12日以降東京帝國大學農學部講師として農業微生物論を講述せられ，昭和16年2月18日には支那事變の發展に伴ひ設置せられた食糧増産技術中央本部の部員を命ぜられ，戦時下食糧増産の企劃に參與せられた。

御退官後は悠々自邸に於て靜養され乍ら，机上に山積した多年の記録を整理して居られ，涼風の吹き初める頃には再び農事試験場囑託として後進の指導に當られる御豫定であつたが，7月中旬喘息の發作に襲はれ，24日朝餘病のため溘焉として永眠せられたのである。先生には未だ年若き一男二女があり，御成人が待たれて居る。

先生の御一生は宿痾喘息病と闘争されつゝ，研究に没頭せられた御生涯であつた。折々襲はれる發作に悩まされ乍ら終始孜々として倦まず弛まず研究室裡に努力された事は溫厚なる御人格と相俟つて内外崇敬の的であつた。又東京帝國大學に於ては後進の指導，誘掖に盡力

せられ、日本植物病理學會に在ては常議員、評議員として會の發展に貢獻せられた。

先生の御業績は頗る多方面に亙り多くの成果を擧げて居られるが、謙讓な御性格のためその多くは筐底に藏さるのみで發表されなかつた事は我々後進として惜みても餘りある事である。大正 4 年熊本に赴任されると同時に着手された研究は「稻の白葉枯病に關する研究」及び「李の黒點病に關する研究」で何れも大正 11 年農事試驗場報告（第 45 號）として發表された。前者に於ては從來不明であつた病原が細菌である事を證明され、同細菌に *Pseudomonas* (*Bacterium*) *oryzae* と命名され、細菌の性質、傳播の經路等を闡明された。後者に在てはその病原が北米合衆國に於て E. F. SMITH 博士の研究になる *Bacterium pruni* と同一なる事を明かにされ、傷痕傳染が重要な傳染方法である事を示された。この研究の頃は一般研究方法が尙現在程進歩して居なかつたため、特に此點に留意されて斬新な研究方法の採擇に努められ、當時植物病理學界に於ては未だ殆ど試みられなかつた細胞液の水素イオン濃度測定を半手製の裝置で試みられた如きは如何に眞摯な研究者であられたかを示す好資料と思はれる。尙この頃試みられた研究は頗る多種多様で、大正 4 年頃には稻馬鹿苗病の研究を行ひ、本病が靱に附着する病原菌に依て惹起する事を實驗し、種子消毒の有効なる事を示された。又當時（大正 4—6 年頃）九州一圓に蔓延しつゝあつた稻菌核病の調査並に研究に従事し、本病の發生が肥料の種類、土壤の反應と密接な關係のある事を實驗的に證明された。大正 7 年頃には稻胡麻葉枯病と稻の品種との關係、大正 7—9 年頃には稻熱病に對する稻品種の抵抗性に就て探究された。其他、大正 6 年頃より大麥及び稈麥の葉枯病、萎縮病、粟の線蟲病、甘藷の蔓割病（病原を *Fusarium* sp. と決定）、心腐病、茄の青枯病等、同 7 年頃には大豆の細菌病、藺の胴枯病、同 8 年頃は柑橘のゴム病、同 11 年頃は麥類銹病、同 12 年には甘藷心腐病を研究された。

熊本時代より大正 13 年迄 8 年間の長い間續行された稻萎縮病の研究（農事試驗場事務工程）は努力をされた研究であつて、ツマグロヨコバヒ、イナヅマヨコバヒの加害と發病との關係、病組織、病原體に就て探究された。そして病原バイラスが蟲體內に在て越冬する事、子孫に傳はるべき事並に稻の他稗も亦發病する事等を發見されたのは大なる御功績と云はなければならない。本研究の傍馬鈴薯のバイラス病（萎縮病）に就ても實驗を行はれた。大正 15 年—昭和 5 年頃迄に亙り稻縮葉枯病に就て研究され、その病原が一種のバイラスなること、昆蟲の媒介に依る事等を推論されたが、其後この研究は中止された。

大正 12 年—昭和 2 年頃には大麻の細菌病（未發表）、蒟蒻腐敗病を研究され、又大正 13 年—昭和 8 年頃迄は土壤中に於ける病原細菌の行動、環境に對する細菌の抵抗力等の研究に傾倒され、土壤傳染を行ふ細菌病防除に基礎を與ふる事に努力された。*Bacterium solanacearum*, *Bacillus aroideae* 等多數の細菌を供試されたのはこの頃である。

御著述は比較的少く、1 は防災科學中の凶作病害篇（岩波書店發行、第 4 卷、昭和 11 年）で稻作の凶作を惹起する病害特に稻熱病に就て論述された。又昭和 16 年、明文堂より發行

された植物病原細菌誌（向秀夫氏と共著）は 800 頁を越える力作で、全世界に亙る病原細菌を系統的に記載したもので、本邦にこの種書物の少い折好評噴々たるものがある。

先生は元來故上田榮次郎博士に師事され、細菌學を研究の對象とされた方で、研究に對する態度は眞摯其物で直往邁進されたので、些事と雖も他人まかせにすると云ふ事は出来なかつた。常に宿痾と闘はれ乍ら、楽しみを研究自體の内に求められて自然科學の探究に終生の努力をせられた學者的態度は誠に尊いものであつた。今や先生亡し。幽明境を異にし、往時の先生の溫容を偲ぶ時轉感無量ならざるを得ない。大東亞の建設も迫り、植物病理學界も益多事ならむとする期、天先生に壽を藉さず、卒然として逝かれた事は誠に惜みても餘りある次第である。

茲に御生前の不滅なるべき御功績と御溫容を思ひ、在天の先生の靈の御冥福を祈りつゝ筆を擱く。

（昭和 17 年 2 月 14 日）